

二〇二四年度 三田学園高等学校入学試験問題

国語

〈注意〉各問題の解答はすべて解答用紙に書き入れなさい。

※出題の都合上、漢字にふりがなをふる、漢字をひらがなにするなど、本文の一部に改変を行っています。

※特に指示のない限り、字数制限のある問題では句読点や記号も一字として数えます。

受験番号	
------	--

一、次の文章は、都会での自転車の生活について書いた文章である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

① はだし

裸足に近い感触が大切だ、と言うなら、いつそ本当に裸足で乗ればよいではないか、と思われる方があるかもしれない。そこがまた違うのだ。自転車は、人間が自然に持っている肉体の能力を少しでも越えたいという欲求が生み出した「機械」である。「機械」はすべて、人間が自然に持っている能力を越えた力を人間に与えてくれるものだ。だから、人間がまったく自然のまま、すなわち、裸のまま「機械」に触れるのはやはり危険なことなのだ。というわけで、裸の肉体の感触を失わず、しかし、裸の肉体の脆さ^{もろさ}を少し保護してくれる微妙なバランスの履物、すなわちスニーカーがいい、ということになるのだ。【Ⅰ】

同じことは、ズボンや上着にも言える。すその広い普通のズボンを穿^はいて自転車に乗ると、たちまちすがチエンに巻き込まれて転んでしまう。普通のズボンは、裸の脚の形を隠すようにデザインされている。その分、裸の脚の形からみれば不自然で、自然な動きが制約される。自転車に乗るには、当然、裸の脚の形にフィットした柔軟な素材のスウェットパンツやタイツのほうがいい、ということになる。

② 「自転車的」服装とは、要するに自然に裸の肉体の形に限りなく近い服装であり、そこが、裸の肉体の形を隠そうとする背広スタイルとは決定的に違うのだ。背広は、都市生活者の中で最も一般的な服装である。それは、都市が裸の肉体の存在を拒否する空間だからなのだろう。自転車は、裸の肉体の存在を拒否する都市という空間で、ある程度この都市の特質とも調和しながら、裸の肉体の感覚を呼び覚ましてくれる不思議な乗り物なのだ。【Ⅱ】

私は、自転車に乗る時は必ず車道を走る。よく「車道を走るのは危険じゃないか」と問われる。

i

走るほうがずっと安全なのだ。なぜなら、A スピードは、B スピードよりはるかに C スピードに近いからだ。歩道を歩

いている人々は、自転車のスピードをまったく予想していない。歩いている人が無意識のうちに持っている体内スピードはあくまで歩く速さである。歩く人が見ている距離も、歩く速さを基準にしている。だから、遠くから時速二、三十キロのスピードでやってくる自転車に対する警戒心などはまったく持っていない。私は乗り始めて二、三年の頃、転んで数回小さなけがをしたが、それはすべて歩道で人を避けるためだった。車道を走るようになってからはまったく転んでいない。それに歩道はいたるところに段差があるが、車道は自動車が行きやすいようにできているので表面が滑らかで安全に走りやすい。こうみると自転車は、あくまで科学技術の進歩が生み出した「機械」の一種であって、裸の自然とは違う都会的乗り物ということになる。

実際、車道を走る時は、車のスピードの流れに乗るのが最も安全であり、したがって私の体内スピードも車のスピードに近くなる。体内スピードが都会的になる、と言ってもいい。都会には、都会独特のスピードやリズムがある。車を運転している人の多くが、無意識のうちにこのスピードやリズムを身につけている。

ii

これだけ多くの車が都内を走っていても、比較的安全に静かに車が流れている。私もこのスピードとリズムを身につけていれば車道を比較的安全に走ることができるというわけだ。

iii

、ここまでは背広にネクタイ、革靴^{かわくつ}で自動車を運転していても、自転車に乗っていても同じことだと言える。しかし、ここから先が^③車と自転車で、決定的な違いがある。おわかりのように、車の場合は、走るためのエネルギーがガソリンによって外から供給されるが、自転車の場合は、自分の生身の肉体の内部からしか供給できない。車の場合は、この都会的スピードやリズムをただ感覚的に身につければよいのだが、自転車の場合は、それを支えるための生身の肉体の能力が必要になる。生身の肉体の能力といっても、それほど大したものが必要なわけではない。毎日五キロ程度のジョギングができる体力があれば充分であろう。この程度の体力を自転車という「機械」が、時速三十キロ、走行距離二十キロぐらいまで増幅してくれるのだ。【Ⅲ】

ただ、ジョギングと違うのは、走るスピードを常に変化させなければならないということだ。都会では信号も多いので、スピード・ゼロからの再スタートが何度もあるし、車の流れによつては急激にトップスピードに入らなければならない時もある。私の自転車の場合は十二段のギア^注チェンジができるが、それも、もともとのエネルギーは自分の肉体なのだから、けっこう息が激しくなることもある。短距離走と長距離走両方を同時にやるような走り方になるわけだ。これは肉体にとって、とてもよい刺激になる。【Ⅳ】

さらに、自転車で行っていると、周囲の状況変化を瞬時にキャッチする動物的感觉が研ぎすまされてくる。^④視覚・聴覚・嗅覚^{きゆう}・触覚などを思

い切り解放して、左右からやって来る車を見張り、横を走る車との距離を判断し、うしろからやって来る車の気配を感じ、それに応じて、自転車のスピードやバランスなどを瞬時に調整する。車は自転車と違って、人間が自然に持っている能力をはるかに越えた能力を持つ高度な「機械」だけれども、それを運転しているのは人間である。たとえ運転する人の顔が見えなくても、車の外側には、その運転する人の気配が漂っている。その人の気配、すなわちスピード感覚やリズムをいち早くキャッチして、自分の自転車との距離を調整し、同時に、私のほうの気配を相手に伝える。相手が私の気配を察知していない、と感じる時には、あえて危険な位置に自転車を一瞬もっていつて相手の注意を促すこともする。すなわち、気配の交流みたいなことも四六時中やることになる。自転車に乗っている間、私の肉体や魂は、大草原で、全身全霊をかけて獲物を追う狩人^{かりうど}と似た状態になるのだ。この状態は、ふだんスポンサーとの会議に出たり、編集機に向かつて映像イメージを創ったりしている時の状態とは百八十度違う。都会で生活しながら時折、肉体と魂をまったく異次元の世界に運んでくれる乗り物、それが自転車なのだ。

都会で健康に生きるためには、時折肉体と魂を反都会的状态、すなわち D に近い状態にもってゆくのがいい。自転車はそれを与えてくれるし、ガソリン代もかからず、思った場所に、思った時間内で、そして多くの場合、車や電車よりも速く到着できる、という意味では、きわめて都会生活にもマッチしていると言える。だから私は^⑤「自転車的」ライフスタイルが好きなのだ。

(龍村仁 『地球のささやき^{ガイア}』より)

注 ギアチェンジ…変速機で速度を変えること。

問一 i iii に入れるのに最も適当なことをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度以上用

いてはいけません。

ア さて イ だから ウ さらに エ しかし

問二 — 部①「裸足に近い感触」とは、どのような「感触」ですか。それを説明している部分を本文から四十字以内で解答欄に合うように

抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問三 — 部②『「自転車的」服装』として、適当なものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 伸縮性のある長ズボン

イ 幅広の長ズボン

ウ 細身のスウェットパンツ

エ オーバーサイズのデニムパンツ

問四 A C にあてはまることは以下の組み合わせとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア (A) 人が歩く B 自転車の C 車が走行する

イ (A) 自転車の B 車が走行する C 人が歩く

ウ (A) 人が歩く B 車が走行する C 自転車の

エ (A) 自転車の B 人が歩く C 車が走行する

問五 — 部③「車と自転車で、決定的な違いがある」とありますが、筆者は自転車の運転には何が必要だと考えていますか。六十字以内で

答えなさい。

問六 — 部④「視覚・聴覚・嗅覚・触覚などを思い切り解放して」とほぼ同じ内容で用いられている表現を、同じ段落内から十字以内で抜

き出して答えなさい。

問七 D にあてはまる最も適切なことばを本文から四字で抜き出さない。

問八 部⑤『自転車的』ライフスタイル』の説明として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 裸の肉体の脆さを隠すために常に自分の服装に気をつけて生活すること。
イ 車に代表される都会的存在を危険なものとして認めないで生活すること。
ウ 都会で生活しても人間が本来持っている能力を忘れないで生活すること。
エ 都会的状况に慣らすために徹底的に肉体と魂を鍛錬しながら生活すること。

問九 本文には次の一文が省略されています。入れるべき最も適切な箇所を【I】～【N】から選び、記号で答えなさい。

【肉体の持っている機能を幅広く使い、活性化するからだ。】

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

盆踊りの帰り、小学六年生の「伸^{しんいち}」、「正治^{まさじ}」、「拓郎」、「舞」は、「拓郎」のいとこの「渡^{わたる}」の話を聞き、担任である「八重子」とともに河原までやってきた。

「どうしたの、おじさん？ ぼーっとして」

「ああ、ちよっとな」

「ちよっと？」

「思い出していたんだ。俺が、お前たちくらいのときのことを」

「おもしろそうだね」

「話してよ」

子供たちに催促された渡は、困ったように、^① ちらりと八重子の顔を見た。しかし、八重子はいたずらっぽい目で笑い返したただけだった。

「先生。先生は、渡さんと同級生だったんだから、知っているよね」

「知ってるよ」

「教えて、教えて」

八重子は、ゆっくりと話し出した。

「子供の頃の渡くんは、真面目で勉強がよくできたなあ。正義感が強くせに、^② ランボウ^{ランボウ}者で負けず嫌いで。そうだ、ちょうどあなたたち三人を足したみたいな子供だったよ」

拓郎と正治と伸一は、^② お互いの顔を見合わせてニヤニヤと笑った。

「それでね、休みはいつも川で魚採りをしていた」

「いつも？」

「ええ、いつも」

「じゃあ、今も昔も、全然変わってねえじゃん」

正治にそう言われて、渡は照れ臭そうに頭を掻いた。

「そうだな、確かに俺は八重子の言うとおり、魚ばかり採っていたな。休みだけじゃない。平日も学校から帰ったらカバン放っぱり出して、川にきていた」

「毎日？」

「ああ、ほとんど毎日だ。夕方なんて一番魚が釣れる時間だろ、じっとしていられるわけがない」

「何を釣るのが好きだった？」

「一番夢中になったのは、ウナギの穴釣りだ。あれは、道具も要らないし、おもしろい。それに釣って帰ったときに自慢できるのが**ミリヨク**だったな」

「分かる、分かる」

正治と伸一が、大きくうなずいた。そして、対岸の真つ暗な林を指さした。

「渡さん。あのポンプ小屋の前にもウナギがいるぜ。ドンコを釣りにいくと、たまに釣れるんだ。なあ、伸一」

「ああ、針金の釣り針じゃ、伸ばされちゃうけどな。たまに釣れるよな」
得意げな顔だった。

「そうか、針金の釣り針か……。お前たち、まだそんなもの使ってたんだな」

「ほかに、何を採った？」

「何でも採ったさ。コイ、フナ、アユ、ウグイ、ニゴイ、オイカワ、ウナギにナマズ。テナガやモクゾウもだな。とにかく、^③子供は何でも採れ」
てのが、じいさんの**クチグセ**だったからな」

「じいさんって、^{注1}源さん？」

「ああ……」

「じいさんは川漁師だったから、商品になる魚しか採らなかったさ。でもな、子供だった俺には、^{注2}雑魚でもいいから何でも採れてよく言ったよ」
「何でも？」

「ああ、網に入った魚は何でも」

それを聞いて、伸一が言った。

「それじゃ、まるで正治だね。採った獲物は絶対に逃さない。いてっ」

正治のげんこつが、伸一の肩に命中した。

「あはははっ」

みんなは、大きな声で笑った。しかし、渡は笑わなかった。^④どこか遠くを見つめるような眼差しで、静かに話し続けた。

「三年生の頃だった。よく、じいさんと一緒に川へいったよ。じいさんは舟でアユを採り、俺は岸辺で雑魚を採る。魚採りをしている間は、楽しくて楽しくて仕方がないんだ。でもな、帰りになるといつも思うことがあるんだ。じいさんの**ヒク**^{注2}にはアユがいっぱいなのに、俺のバケツには雑魚ばかり。それは、とっても悔しいことだった。何しろ、自分の宝が目の前でかすんでしまうんだからな。で、俺はじいさんに頼んだよ、舟に乗せてくれて。刺網^{注3}や投網を使わせてくれて。でもな、じいさんは乗せてくれなかった。そして、こう言うんだ。^⑤『アユばかり見るな。ア

ユばかり見ていると川が見えんようになる』それはな、難しいことだった。子供の俺には分からないことだった。でもな、いまだに忘れられない一言だよ」

「アユばかり見てると、川が見えんようになる？」

子供たちは口々につぶやいた。

「分かるか？」

「分からん」

「コイばかり見ても川は見えなくなるし、ウナギばかり見ても、やっぱり川は見えなくなる」

「うーん、難しいや」

「この川には、いろんな魚が棲^すんでいる。そいつは、分かるだろ」

「うん」

「魚だけで数十種類。雑魚と呼ばれる魚の方が、うんと多いんだ」

「へーっ、そんなにいるんだ」

「おまけに虫もいれば鳥もいる。水草もあれば、両岸を^dオオ植物も数知れない。そんな奴^{やつ}らがひと固まりになって棲^すんでいるのが、この川だ。じいさんはそんなことが言いたかったんじゃないかなあと、俺は思うんだ」

「へへっ、考えたこともないや」

「それでいい。子供はそんなこと考えなくていい。ただ、川に足を浸^つけたときの冷たさや、焼けつく河原の砂の熱さ。水草に手を突^つ込んだときのくすぐったさや、そこから飛び出す小魚のきらめきを、目に焼き付けたり肌で感じたりすればいいんだ」

「それだけで？」

「ああ、それだけでいい……」

「……」

それから、しばらく子供たちは黙^もり込んでしまった。おそらく、渡の言葉に驚^{おど}いてしまったのだ。渡と知り合^あって二か月しか経^たっていなかったが、渡^⑥がこんなふうに熱く語るのを聞いたのは初めてだった。優しくて、いつもニコニコして、のんびりと川漁を楽しんでいる渡しか見たことがなかったからだ。伸一や正治や舞^まだけでは、拓郎や八重子でさえ、そう思った。

「じいさんは、ひょうひょうとして、いつも黙^もって魚を採^とっていたけれど、一度だけ、ひどく怒^{おこ}ったことがあったな。玉網^{注4}でドジョウを採^とっていたときだ。ドジョウを採るとき、網に入^いったドジョウを泥^{どろ}ごと岸に上げるだろ。ベチャって。あのときは大漁だったからさ、俺は次々に泥をすくっていったんだ。そうしたら、じいさん、本気で怒^{おこ}ったな」

「何で？」

神妙な顔で拓郎が聞いた。

「俺が、ドジョウだけをカゴに入れて進んでいったからさ。泥の中には、タニシやニナやヤゴなんかがいっぱいいいたのに、知らん顔していったからさ。炎天に放っておいたら、どうなる？」

「死んじゃうね」

「ああ、^⑦むだな殺生はするなって、こっぴどく叱られたよ。恥ずかしいことに、俺の目にはドジョウしか見えていなかった」
そこまで話すと、渡はポケットからタバコを取り出した。

パシュツ、

マッチの火が渡の顔を照らし出す。いつになく。シンミョウで、^⑧どこか寂しげな顔だった。子供たちは、その顔を黙ったままじっと見つめた。いつもは大人の話を真面目に聞かない彼らが、真剣な顔つきをしていた。いや、こんなに真剣な顔で語ってくれる大人が、いなかったのかもしれない。

ふうっ、

渡の吐いた白い煙が、ゆったりとした川の風に溶けていった。

(阿部夏丸『峰雲へ』より)

注1 源さん：この話の三ヶ月前に亡くなっている隣の村に住む川漁師。

注2 ビク：袋状に編まれており、釣り上げた魚を一時的に入れておく道具。

注3 刺網や投網：魚類などの水生動物を捕獲するための漁網の一種。

注4 玉網：魚をすくい上げるのに用いる柄のついた丸い網。

問一 部 a「ランボウ」・ b「ミリヨク」・ c「クチグセ」・ d「オオウ」・ e「シンミョウ」のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 部①「ちらりと八重子の顔を見た」とありますが、このときの「渡」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア つらい過去の記憶なので、「八重子」に適当な話でごまかしてほしいと思う気持ち。
イ かがやかしい思い出なので、自分の代わりに「八重子」に話をしてほしいと思う気持ち。
ウ 自分の魚が取られるので、「八重子」にあまりくわしくは話をしないでほしいと思う気持ち。
エ 子どもに正直に話してよいか迷ったので、「八重子」に判断してほしいと思う気持ち。

問三 部②「お互いの顔を見合わせてニヤニヤと笑った」とありますが、この時の三人の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちの性格を指摘されたようで照れくさい気持ちと、「渡」に似ていることを嬉しく感じる気持ち。
イ 子どもの頃の「渡」と同じで恥ずかしい気持ちと、「三人を足した」人間などいないとあやしむ気持ち。
ウ 「八重子」が理解してくれていることに安心する気持ちと、お互いにそう感じていることで気まづくなる気持ち。
エ 三人それぞれの個性が評価されて興奮する気持ちと、誰が一番「渡」に似ているのか気になる気持ち。

問四 部③「子供は何でも採れ」とありますが、これについて説明した次の文の（ ）にあてはまることばを本文から十五字以内で抜き出して答えなさい。

この言葉について、「伸一」たちは、（ ）ということだと勘違いした。

問五 部④「どこか遠くを見つめるような眼差し」、部⑤「どこか寂しげな顔」とありますが、「渡」がこのような表情をしている原因となった出来事を解答欄に合うように、十字以内で答えなさい。

問六

——部⑤「アユばかり見るな。アユばかり見ていると川が見えんようになる」とありますが、「川が見える」とはどういうことで
すか。四十字以内で説明しなさい。

問七

——部⑥「こんなふうに熱く語る」とありますが、この説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもは自然を体全体で感じるのが大切だと、まじめに教えている。
イ 子どもは何も考えず分け隔てなく遊ぶべきだと、陽気に話している。
ウ 子どもは大人の言うことをすべて聞くべきだと、真剣に伝えている。
エ 子どもは川漁を学校生活に役立てるのがよいと、熱心に訴えている。

問八

——部⑦「むだな殺生」とありますが、なぜ「源さん」は叱ったのですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で
答えなさい。

ア 日頃から何でも採るように言っているのに、言いつけを守らなかったから。
イ ドジョウを採るために泥ごとすくうのは、教えたやり方と違っていたから。
ウ ドジョウ以外の生き物を、そのまま放っておいて死なせてしまったから。
エ 仕事のために命を奪う自分と違って、子どもの殺生には意味がないから。

三、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

今は昔、^アあふみの国^{注1} 依智^{えち}のこほり^イ、賀野^{かの}の村に一つの古き寺あり。その寺に地蔵菩薩^{ぢざうぼさつ}の像^{ざう}まします。その寺は、^{注2}検非違左衛門の尉^{けびゐさもん}、平

諸道^{もろみち}が先祖^{注3}の氏寺^{うちでら}なり。かの諸道^{もろみち}が父は、極めて武^{きは}き者^{たけ}にてぞありける。しかれば、常に合戦^{かふせん}をもつて業^{わざ}とす。

^(その平諸道の父は、たいへん武勇の功績のある者だった。)

しかる間、敵^{あひだ}を攻めて討^うたむがために、数^{かず}の随兵^{ずいひやう}を率^{そつ}してすでに戦^{いくさ}ふ間、^{注4}胡録^{やなぐひ}の矢^や、皆射^{みな}尽くして、^②すべき方もなかりけるに、心^{うち}の内に、「我^わ

が氏寺^{さむぼう}の三宝^{さんぼう}、地蔵菩薩^{ぢざうぼさつ}、我^わを助けたまへ。」と念^{ねむ}じ奉^{たてまつ}るほどに、^(急に戦場に)にはかに戦^{いくさ}ひの庭^{にわ}に一人の小僧^{こぞう}出^いで来たりて、矢^やを拾^{ひろ}ひ取りて、諸道^{もろみち}が父に与^よふ。

^③これ不慮^{ふりよ}の外^{ほか}の事なりといへども、その矢^やを取りて射戦^{しせん}ふほどに、見れば、その矢^や拾^{ひろ}ふ小僧^{こぞう}の背^せに、矢^や射^や立てられぬ。その後、小僧^{こぞう}たちまに

^(すぐに)

見えなくなりぬ。「小僧^{こぞう}逃げぬるなめり。」と思^{おも}ひて、かくのごとく戦^{いくさ}ふ間、諸道^{もろみち}が父本意^{ほんい}のごとく敵^{あへ}を殺^{ころ}しえつれば、戦^{いくさ}ひに勝^{かち}ぬる事^{こと}を喜^{よろこ}

^(小僧は逃げ去っていったようだ。)

^(もとの通りに戦っている。)

^(目算通りに)

びて家に帰^{かへ}りぬ。

「この矢^や拾^{ひろ}ふ小僧^{こぞう}なほ誰^{たれ}人^{ひと}の従^{じゆしや}者^{もの}ぞ。また、何処^{いどこ}より来^きたれる者^{もの}。」と知らずして東西^{とうざい}を尋^{たず}ねしむるに、さらに知りたりと言^いふ人^{ひと}なし。「我^わに矢^やを

^(いったい)

^(あちこち探させてみたが、知っていると云う人がまったくいなかった。)

拾^{ひろ}ひて得^えしめつるほどに、背^せに矢^やを射^や立てられぬれば、もし死^しにやしめらむ。」と哀^{あは}れにいとほしく思^{おも}ふといへども、^④尋^{たず}ねえずして止^やみぬ。

^(なんともかわいそうに思われたが。)

その後、諸道^{もろみち}が父の氏寺^{しじ}に詣^{まう}でて地蔵菩薩^{ぢざうぼさつ}を見奉^{みほう}るに、背^せに矢^や一筋^{ひとすぢ}射^や立てられたり。諸道^{もろみち}が父これを見て、「されば、戦^{いくさ}ひの庭^{にわ}にして矢^やを拾^{ひろ}ひ

て我^わに得^えしめしめし小僧^{こぞう}は、^{注6}早^{まう}うこの地蔵菩薩^{ぢざうぼさつ}の我^わを助^{たす}けむとて変化^{へんぐゑ}したまひけるなりけり。」と思^{おも}ふに、^⑤哀^{あは}れに悲^{かな}しくて、泣^{なみ}く泣^{なみ}く礼^{らい}拝^{はい}し奉^{ほう}る事^{こと}

^(私に持たせた小僧は、)

限りなし。

(『今昔物語集』より)

注1 依智…地名。

注2 検非違左衛門の尉…検非違使という役職と左衛門の尉という役職を兼任していた。

注3 氏寺…特定一族が信仰する寺。

注4 胡録…矢を入れて持ち運ぶために右腰に付ける道具。

注5 不慮の外の事…思いがけないこと。意外なこと。

注6 早うけり…さてはうだったか。(その時に思い当たったことを表す。)

問一

部ア「あふみ」・イ「こほり」の読みを現代かなづかいで答えなさい。

問二

部①・②・④の解釈として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

①

「業とす」

ア 有名であった

イ 武術に長けていた

ウ 仕事としていた

エ 勝利していた

②

「すべき方もなかりけるに」

ア どうしようもなかったので

イ なんとかしてやろうとして

ウ 次の手を考えているうちに

エ がまんしていたところに

④

「尋ねえずして止みぬ」

ア 探し出せたので搜索をやめた

イ 探し出せたが連れて来なかった

ウ 探し出すのをあきらめなかった

エ 探し出せないで終わった

問三

部③「これ不慮の外の事なり」とありますが、「これ」とは、どのようなことを指していますか。三十字程度で答えなさい。

問四

部⑤「哀れに悲しくて、泣く泣く礼拝し奉る事限りなし」とありますが、次の会話文は、この表現についての授業中の会話です。後の問い(ⅰ)～(ⅳ)について答えなさい。

(会話文)

生徒 A 「哀れに悲しくて、泣く泣く礼拝し奉る事限りなし」とあるけれど、これはどういう心情なのかな？

生徒 B 「哀れに悲しくて」は W に対する心情だね。

生徒 「そうですね。『諸道が父』がこのような心情になったのは、 W が X ことに気が付いたからですね。仏教の教えでは、もちろん戦をして命を取り合うことなどしてはいけません。しかし、それでも W が戦の場にやってきたことに対して、強い Y の思いを抱いていたと言えるでしょう。

生徒 C 先生、どうして W が戦の場にやってきたとわかるのですか？

先生 「諸道が父」が氏寺に参ったときに Z からですね。

(i) W に入る四字の語を本文から抜き出して答えなさい。

(ii) X に入ふさわしい内容を二十字以内で答えなさい。

(iii) Y に入る最も適当な語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 後悔 イ 興奮 ウ 感謝 エ 謝罪 オ 歓喜

(iv) Z に入ふさわしい内容を三十五字以内で答えなさい。

〔以下空白〕

